

問1 (ウ)・(エ)

問2 (エ)

問3 (ア) けれ / (イ) しか

問4 その時は悲しみのあまり心が動転しており、確かに書いたという記憶がないから。〔解答例〕

問5 (エ)

問6 父親の旅立っていった常陸国が東方にあるため、東の山際を眺めつつ、父の道中の身を案じて物思いにふけている。〔解答例〕

出典：『更級日記』「野辺の笹原」／ 亜細亜大学・経済学部・88年

## 現代語訳

その(年の)五月の一日に、姉が、子供を産んで亡くなってしまった。他人のことでさえ、(人の死というものは)幼い時からたいそうしみじみと悲しいと思いつけてきたが、(この度は肉親の姉のことであるから)まして言いようもなく、しみじみと悲しいと思いつくはずにはられない。母などは皆、亡くなった(姉の)部屋にいたので、(私は姉の)形見として残された幼い子供達を左右に寝かせていたところ、破れた板葺きの屋根の隙間から、月(の光)が洩れてきて、子供の顔にあたっているのが、たいそう不吉に思われるので、(その子の顔に)袖をかぶせて、もう一人(の子)も抱き寄せて、(あれこれ)思うとたいそう悲しい。

その期間(「当座の法事など」が過ぎて、親戚のところから、「亡き人(「姉」)が『必ず探して送ってください』と言ったので、探したが、その時は、見つけれずじまいだったのに、(亡くなった)今になって、(ある)人が(見つけて)よこしてくれたのが、しみじみと悲しいこと(です)」と言つて、「かばねたづぬる宮」という物語を送ってくれた。本当にしみじみと悲しいことよ。

(その)返事に(私は次のように詠んだ)、

うづもれぬ……(この世に)埋もれずに(残つて)いた「かばね(たづぬる宮)」(などという不吉な書物)を、(姉は)どうして探し求めたのでしょうか。苔の下で(姉本人の)身こそがかばねとなって(むなしく)埋もれてしまいました。

(姉の)乳母であった人が、「(お嬢様が亡くなった)今となつては、どうして(このお屋敷に残ることができましようか)」などと(言つて)、泣く泣く、もと住んでいた所(「実家」)に帰っていくので、(その乳母に私は次のように詠んだ)

「ふるさとに……実家にこのようにあなたは帰つてゆくのですね。(これも姉の死ゆえと思うと姉の死は)ああどのような悲しい別れだったのでしょうか(「ああ何という姉との悲しい死別であったのでしょうか)。」

(あなたは)亡き姉の形見として、何とかして(この家に居残つてほしい)と思ひます」などと言ひ送つた(その)返事に、(乳母は次のように書いてきた)

慰さむる……干渴のない波打ち際で浜辺の千鳥が足跡を留めることができないうちに、(ご主人を亡くして)慰めるすべもない私

は、どうしてもこの（思い出だけが残る）つらい家に留まることができず、いやできません。

**解答**

問 1 ① 自発 ② 過去 ③ 打消 ④ 過去の原因推量

問 2 (a) C (b) D 問 3 D

問 4 F 問 5 乳母なりし人〔本文9行目〕

問 6 乳母なりし人〔本文9行目〕

**解説**

問 1 文法問題。助動詞の識別問題。接続からどのような助動詞であるかを確定し、次に文脈からふさわしい意味を判断する。

① 上にある「思ひ歎か」はカ行四段活用の動詞「思ひ歎く」の未然形なので、傍線部は助動詞「る」の終止形。「る」には受身、尊敬、可能、自発の四つの意味があるが、「思ひ歎く」のような心情を表す動詞に接続している時は、自発を表すことが多い。自発は、意識的ではなく、自然とそうになるという意味で、ここでは「自然と思ひ歎く、思ひ歎かずにはいられない」といった意味になる。

② 上にある「に」は完了の助動詞「ぬ」の連用形なので、②は助動詞「き」の連体形。「き」の意味は一つで、直接体験の過去を表す。親戚の人自身が「かつて見つけることができなかつた」というのである。

③ 上にある「うづもれ」はラ行下二段活用の動詞「うづもる」の未然形か連用形。未然形に接続する「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形であり、連用形に接続する「ぬ」は完了の助動詞「ぬ」の終止形である。そこで、③の下をみると、体言「かばね」が続いている。体言に接続するのは連体形であるから、傍線部は連体形であり、したがって打消を表す。「かばね」はここでは「かばねたづぬる宮」という物語を指し、「世間に埋もれることがなく、見つけることのできた物語」という意味になる。

④ 上にある「たづね」はナ行下二段活用の助動詞「たづぬ」の未然形か連用形。傍線部は連用形に接続する助動詞「けむ」の連体形と考えられる。「けむ」には過去推量、過去の原因推量、過去の婉曲・伝聞という三つの意味がある。ここでは、「何に」という「どうして、なぜ」という意味の疑問語があり、「どうして探したのだろう」と理由を推量しているので、過去の原因推量の意味を表している。

問2 解釈問題。まずは傍線部を正確に口語訳し、その上で状況や場面を考慮して最適な意味内容の選択肢を選ぶ。

(a) について。傍線部の「あはれ」は感動詞で「ああ」という感動の気持ちを表す。「いかなる」は形容動詞「いかなり」の連体形で、「どのような、どういう」という意味を表す。「別れ」は名詞で、現代語と同じ意味。「なり」は体言に接続しているので、断定の助動詞「なり」の連用形であり、「けむ」は過去推量の助動詞「けむ」の連体形。そこで、傍線部を直訳すると「ああ、どのような別れであったのだろうか」となる。次に、「別れ」の内容について考える。傍線部を含む歌は、作者が実家に帰っていく乳母に向けて詠んだもの。ただし、この「別れ」を乳母との別れと考えると、今現在別れるのであるから、過去推量「けむ」が用いられているのは不自然である。また、乳母は主人が亡くなったのでこの家を去ると言っているのだから、どのような別れと疑問が出てくるのも状況にそぐわない。そこで、過去における別れということで、この「別れ」は姉との死別を指すと考えられる。姉との別れは姉一人に留まることなく、乳母との別れまでも引き起こした。そうした姉の死別の意味に思い至り、改めてその死別の悲しみを味わっているのである。

選択肢AとDの「なのででしょうか」、Bの「ことができましょう」はいずれも過去の時制ではなく、過去推量「けむ」が訳出されていない点で、まずは不適切。さらに、AとDは「あなたとの別れ」とあり、「別れ」を乳母との別れと解釈している点も不適切。またBの「たとえる」という意味を表す語は傍線部ではなく、そのように解釈をすることもできないので、やはりBも不適切である。

(b) について。傍線部の「なに」は疑問や反語を表す副詞で「どうして、なぜ」という意味であり、「か」も同じく疑問や反語を表す係助詞。「うき世」は「憂き世」と考えられ、「つらくはかないこの世」という意味。「跡もどむ」は「足跡を留める」という意味から、「その場に残る」と解釈できる。「む」は推量の助動詞「む」の連体形。そこで、傍線部を直訳すると「どうしてつらいこの世に留まることができようか」となり、自分のことを言っているのだから、「いや、できない」と反語で解釈するの

が適切。この表現だけを見ると、もうこの世で生きていくことはできないと言っているようにも思えるが、傍線部を含む歌は、実家に帰らぬように引き留めた作者に向けての、乳母の返事である。そこで、「憂き世」は広くこの世を指すのではなく、乳母の主人にあたる姉との思い出だけが残るつらいこの家を指していると考えられる。そこで、傍線部の解釈は「どうしてつらいこの家にとどまることができずしょうか、いやできない」となり、乳母はあくまでも実家に帰りたいという気持ちを表しているのである。選択肢AとBは「なにか」の解釈が不適切。「なにか」には「どうかして」という願望の意味はなく、また「あれこれ」という意味内容はここでは不適切。また、Cは先にも見たように「憂き世」を広く「この世」と考えて、もはや生きてはいけないと解釈している点が不適切。

### 問3

古語の意味の問題。一つの単語がさまざまな意味を表す場合は、文脈を丁寧にたどって、その場にふさわしい意味を判断する。

「ゆゆしく」は形容詞「ゆゆし」の連用形である。「ゆゆし」は神聖の意を表す「斎(ゆ)」を重ねて形容詞化したもので、「神聖で恐れ多い」という意味を表す。また、「不吉である、縁起が悪い」、「良い意味でも悪い意味でも程度がはなはだしい」といった意味がある。傍線部は、寝ている子供の顔に月の光が当たっているのを見た作者の気持ちである。子供の寝顔が青白い月の光を浴びて、まるで死人の顔のように見えたのであろう。折しも、子供の母親が亡くなったばかりであるから、作者は不吉だと思ったのである。そこで、傍線部の「ゆゆしく」は「不吉に」という意味である。

選択肢を順にみていく。

Aは、立派な大社、すなわち出雲大社を人々が参拝して、信仰心を起こしたのであるから、傍線部は良い意味で「非常に深い」と信仰心を説明している。「ゆゆしく」は程度がはなはだしい意味を表している。

Bは、世の中が大殿の思いのままであるという状態についての説明である。「大殿」のことを作者がどのように思っているかでさまざまな解釈が成り立つが、一般には「たいそうすばらしい」という良い意味にとれ、傍線部はやはり程度がはなはだしい意味を表している。

Cは、光頼卿が信頼の上座に着席なさった時の様子である。ここでも、二人が置かれている状況や二人の人間関係がこの短文からでは読み取れないので、解釈が難しいが、一般には上座に座った堂々とした姿が「たいそう立派ですばらしい」という良い意味にとれ、傍線部はやはり程度がはなはだしい意味を表している。

Dは、道中、雨が降るのではないか、雷が鳴るのではないかと思つた時の気持ちを表している。その後仏にも祈つてゐるところから、天候の悪さが「とても不吉で」悲しく思われたと解釈できる。そこで、傍線部は「不吉で」という意味を表し、したがつてこれが正解となる。

#### 問4

空欄補充問題。選択肢はすべて助動詞なので、接続が適切なものをまずは選び出す。次に、空欄にあてはまる活用形から、選択肢をしぼり、最後に文脈から最適な意味を表すものを見つけ出す。

空欄の上にある「なり」は、ラ行四段活用の動詞「なる」の連用形。そこで、選択肢から連用形接続の助動詞を選ぶと、AとBを除いた残りすべてとなる。Bの推量の助動詞「めり」と、その連体形であるAの「める」は終止形接続。ただし、ラ変型の語の場合は連体形接続となる。また、Cの「たり」と、その連体形であるDの「たる」は連用形に接続する場合は断定ではなく、完了の意の助動詞ということになる。

次に空欄にあてはまる活用形を考える。空欄の上には係助詞「こそ」があるので、係り結びの法則から、空欄には「こそ」の結びとなる已然形の語が入るはず。そこで、選択肢C～Hの中から已然形のものを選ぶと、Fの「けれ」一つしかない。「けれ」は過去の助動詞「けり」の已然形である。もつともこの歌の中では詠嘆を表している。したがつて正解はFとなる。

なお、念のため、残りの選択肢をみておく。Eの「ける」は「けり」の連体形、Gの「つる」は完了の助動詞「つ」の連体形、Hの「けむ」は過去推量を表す。

#### 問5

内容理解の問題。まずは古語単語の意味を正確に押さえた上で、文脈から、誰を指しているのかを読み取る。

「形見」とは、「死んだ人や別れた人の残したもの」、あるいは「過ぎ去つた昔を思い出すてがかりとなるもの」を意味する。ここでは「昔の形見」とあるが、「昔」とは作者の姉が元気に生きていた時を指す。そこで、「昔の形見」とは、亡くなった姉を思い出すてがかりとなる人物ということになる。この言葉は、作者の乳母に向けての手紙の中にある。作者は、乳母とも別れなければならなくなつた姉との死別をあらためて悲しむ歌を記した後で、「昔の形見には、いかでとなむ思ふ」と言葉を続ける。「いかで」はここでは願望の意を表し、その後に省略されている意味内容を補うと、「何とかして、この家にとどまてほしい」と解釈できる。作者が乳母を実家には帰さず、この家に留まるよう説得しているのだから、亡くなつた姉を思い出す手がかりになる人物とは、乳

母のことである。姉は亡くなってしまったものの、姉の世話をしていた乳母がいれば、いつも姉を思い出すことができる。だから、いつまでもこの家においてほしいというのである。

したがって正解は、文中の語を使って、「乳母なりし人」となる。

**問6** 内容理解の問題。ここでは和歌の解釈が問われている。下の（注）に掛詞の説明があるので、それも参考にして、この歌の内容を正確に読み取ることが必要である。

まずは「浜千鳥」を文字通り、「浜辺にいる千鳥」の意味でとらえて歌の解釈を試みる。「浜千鳥」に関係のあるものとして、「かた」は「干潟」の意味、「なぎさ」は「渚」と「無き」の両方の意味で考える。すると、この歌は「干潟もない波打ち際の浜千鳥は、どうして足跡をとどめることができるでしょうか、いやできません」となる。「なにか」はここでは反語を表している。

設問から「浜千鳥」は誰か、人をたとえたものなので、次に、この歌を人間に置き換えて解釈し直してみる。今度は、「かた」を方法の意味で、「なぎさ」を「無き」の意味で考えると、「慰める方法もないのでどうしてこのつらい家に留まっていられるでしょうか、いやできません」となる。とどまることができなの、浜千鳥と同じだというのである。そこで、慰める方法もないということから、主人にあたる姉の死を悲しんでいる乳母の姿を想像できる。そもそもこの歌は、乳母が詠んだもので、この家に残ってほしいという作者の言葉に対する返事である。乳母は悲しい自分の気持ちを慰めようもないので、思い出の残るこの家には留まれないと断った。乳母は自分自身を浜千鳥にたとえることで、留まれるはずのないことを訴えているのである。したがって、文中の語を使うと、正解は「乳母なりし人」となる。

## 《補充問題》

## 現代語訳

- 問1 (1) 刑部卿敦兼は、容貌がとても醜い感じの人であった。その奥方は、美しい人であったが、  
 (2) 晴明の家の前をお通りになると、晴明自身の声がして、手をはげしく、はたはたと打つようだ。
- 問2 (1) 子供になりなさにちがいない人であるようだ。  
 (2) 笛をととても趣深く吹いて、通り過ぎたようだ。
- 問3 (1) 秋の夜は露がことさら寒いらしい。各々の草むらで虫がつらがつっているので  
 (2) 真夜中となって夜はふけてしまったらしい。雁の鳴き声が聞こえる空のほうへ月が渡って行くのが見えるので  
 (3) 気の毒なほどであったようだ。
- 問4 もし世の中になったく桜がなかったとしたら、春の気分はのんびりとしたものであるうに
- 問5 (1) どのようにしようかと思悩む。  
 (2) 鏡に、色や形があったとしたら、映らないだろうに。

## 解答

- 問1 (a) ナリ活用形容動詞「にくさげなり」の連体形語尾  
 (b) 断定の助動詞「なり」の連用形  
 (c) ナリ活用形容動詞「はなやかなり」の連体形語尾  
 (d) 伝聞推定の助動詞「なり」の連体形
- 問2 (i) (a) ラ行四段活用動詞「なる」の連用形  
 (b) 断定の助動詞「なり」の連体形



- (ii) (c) 伝聞推定の助動詞「なり」の終止形
- (1) 子供になりなさにちがいない人であるようだ。
- (2) 笛をととても趣深く吹いて、通り過ぎたようだ。

**問 3**

- (1) 已然形
- (2) 終止形
- (3) 連用形

**問 4**

(ア)

**問 5**

- (1) どのようにしようか
- (2) (もし) あったとしたら、映らないだろうに

## 【問題】(演習)

出典：『御伽草子』(うたたねの草子) / 明治大学・04年

## 現代語訳

はつきりと御覧になった昼寝の夢も、そのなり行く先も知りたく、それにしても美しく、見る価値があるほどだった(男君の手紙の)筆跡も、お心にかかって、しみじみと物思いにふけていらっしやるうちに、やがて日も暮れていったので、灯火をともしなさないことだけが、何となく気がかりに思われなざるのが、我ながら不思議な気がしなざる。(姫君は)何やかやと遊びに興じるが、大層物思いがつのるので、近くの御几帳を引き寄せて、うとうとと仮寝なざるようにおやすみになる(その)側に、少し糊気が落ちて柔かく見える直衣に紅色の着物を重ねて(着て)、紫苑色の指貫で、色もつやも並々でな(く美し)い指貫が、香りが強く染みこみ、(その香りが)姫君御自身にまでにおい漂いかかる気がして、(男君が)たいそう馴れ親しそうに姫君に寄り添い臥している(姫君は)御胸がどきどきして、ふと見上げなざると、あの昔語りで評判の高い光源氏の君も、これほど美しくは(あろうか、いやあるまい)と、思われるほどにまで、輝くように美しく温和で魅力的で、その上しつとりと落ち着いて物静かでない(あろうか、いやあるまい)と、多くのなまめかしさは、まことに男性も備えていたのだなあと、言葉には言い尽くせないほど御気持ちが乱れなざるけれど、ただ思わずよよと泣いてしまえばかりで、お声も出ない。(男君は)ちょっと体を動かそうとする(姫君の)お手をとらえて、「それにして、思い余って(『我慢しきれない』私の(恋)心のさまは、そうはいってもかわいそうだとわかってくださってもよいのに(それもなさらず)、取るに足りない手紙までも(あなたは)御覧にならないのでしょうか。一行のお返事さえも見せ(『書い』てくださらない恨めしさに、こんなにお側近くにまで参上したのを、せめて(古歌あるように)『あなたを思う恋心には堪え忍ぶ心が負けるという習慣で』とだけでも、やはりわかってくださらないのでしょうか(わかってくださいよ)。あれこれするのも、現世だけでな

い（前世から結ばれている男女の）因縁であるので、逃れることのできない前世からの御因縁とってお許しください。ひたすら心の晴らしようのないような（恋の）思いの結末は、かえって報いが恐ろしい例も多くありますので、私もあなたも、現世では、つまらない浮名を流し、死後の世界ではいつまでも成仏できないで終わるといふ縁も、恨めしくはお思いませんか」など、まったく真似ることのできないほど、くどくど言うので、（姫君は）お返事もどのようにならぬかとお思ひになるけれど、女（＝姫君）もそうはいってもやはり非情だとは思われたいと、お思ひになるのだろう。

**解答**

問 1 1

問 2 B 〓のうし C 〓さしぬき

問 3 4

問 4 仮寝をするようにおやすみになっている姫君のそばに、

問 5 4

問 6 筆の跡（1行目）

問 7 2

出典：『御伽草子』〈室町物語〉／東京都立大学・前期日程

## 現代語訳

「私は東国へ急ぎ旅をしている僧侶です。どういう御用でございましょうか。早く早く（おいとまさせていただきたい）」と（西行法師が）おっしゃると、姫君が（縁側まで）出ておいであそばして、（それが実の父とはつゆ知らず）「なんて気が引けることでしょう。あのう、お坊さま、この家を御覧になって、荒れ果てて、人が訪ねてくる道も（草が茂ってもうはつきりとは）見えなく（なっていることを）、呆れたこととお思いあそばしていらつしやることでしょう。けれども、（私は）父には生きながら取り残され、母には死に別れて、もう三年になり、あの刑部（という家来）だけを頼りにしておりますけれど、（先ほどのあなたさまへの御無礼のことを思えば、刑部はこの家に）いても（ただいるだけで）頼りにならないあります。それにしても（刑部ったら無礼にも）思いやりもない態度で（尊い）修行者の方に御応対申しあげたことです。家に役に立つ（孝行な）子がいれば、必ずその家を大切に守ります。国に（その諫言を君主が）採りあげる守護がいれば、必ずその国は穏やかです。（そのように役に立つ家来がいればよいのですが、あいにく）この家ではみなし子となつてしまつて、私ひとりでございますから、どんな（無礼な）間違いをもお許しくださいます。それに付けても、申しあげたいことがございます。西国（で）修行（してこられた）とおっしゃいますと、（その間に）九州の九カ国の中でどこかで、鳥羽院の御所に（お仕えしていた）佐藤兵衛義清・法名を西行と申す人（お坊さまは今までに）会つておいでになりますか。（私にとつては）恋しい（人の）ことですから、夜も昼もその（西行法師からの）消息（が届くこと）をお祈り申しあげているのです」ということを（姫君は西行法師に）お話しになつて、袖を顔に押し当ててお泣きになるので、西行は（姫の話をお聞きになつて、「それでは（わが）妻もお亡くなりになつたのであろうか。両親に取り残されて一人で暮らす孤児が、それでもやはり父のことを大切に思つて、こうして問訊ねるのだなあ。『その父だ』』と言いで（私が）名乗ればさぞかし喜ぶにきまつているが、かわいそうに」と思ふのだが、「（いやいや、出家した自分が肉親の情にほだされて）気弱になつては（仏道修行は）成就するはずもない。どうしても（互いに親子の名乗りを挙げて）対面することはできるわけがないのだから、『その人なら』もう死んでいる」といふふうに言つてやろう」と思つて、声を（わざと）荒々しく張り上げて（かぶつていた）笠を傾け（顔を隠し）、「私は修行を七、八年続けてま

いりましたが、『義清』と(いう名前)は聞いたこともございません。(ただし)去年の秋のころ、豊後の国のこと島の村里を通りかかったときに、新しい卒塔婆がありました。立ち寄って(その卒塔婆を)見ると、『諸行無常』という文章が書いてあって、(その)下に『故・西行』とありました。『これは聞いたことのあるような名前ですな』と(私が)近くの人に尋ねてみると、『都の(出身の)人ということ、九州を(経巡って)修行していた人で、西行と言って、今日から五、六日前にこの村でお亡くなりあそばしたのでございます』と教えてくれたものです。あんまりお気の毒に存じまして、(私もそこに)その日はしばしとどまって、お経を上げ、念仏をとなえてそこを離れました。(お訊ねの人が)その人のことでしたら、現世で会うことは(もう)できるはずありません。(せめてその人の)菩提をお弔いなさい』と(西行はわが娘に)お話しになる。

姫君は(西行の話を)お聞きあそばして、「今の話は夢か、現実か、幻か」と(言つ)て(その場に)倒れこみ、(それを見ていた)侍女たちも(家来の)刑部も流れ落ちる涙が(あまりの悲しみに)焦がれるようで、(そんな中で姫君は)袖を顔に押し当てて、お泣き悲しみになった。(その様子に接した西行も)「姫はまだ(成人の)御年齢にも達してはおいでにならず、数えで(わずか数えの)九歳におなりになる。(そんなに幼いのに)これほどまでに親のことを心から悲しんでいることだなあ。子でなくては、どここのだれが、これほどまで(親の死を悲しんで)嘆いてくれるはずがあるか(いや、子だからこそその悲しみなのだ)」と(涙で濡れた)袖をお絞りあそばすのだった。姫君は、しばらくすると、御簾の中(の奥まった部屋)にお入りになって、唐櫃の蓋(「広蓋、お盆のように入れ物としても用いる)に僧衣と袈裟と柿本人麻呂の肖像画をお入れあそばして、自分の手で持ち、西行のおそばへお近寄りあそばして、涙ながらにおっしゃったことには、「(この僧衣は)私の母が、父のためにと(言つ)て作ってお置きあそばして、『どこからでも(いいから)消息があったらお送りしよう』と思っただけなんです、(その母も)一昨年秋のころ、お亡くなりあそばしたので。また、この袈裟は私が作って置いて、『(父上の)行方(の報せ)でもありましたら、お送りしよう』と思っただけなのに、それでは、(父は)お亡くなりになったのですね。この人麻呂の絵は、(父が)たいそう大切に持っておいでで、(歌道の先達として)尊んでいらしたのですが、(ある方への)どうしようもない恋のために気が落ち着かず、(それを契機として)出家の決心をなさって、内密に慌てて(出家の)準備をしておいでになるうちに、(その慌ただしさに紛れて)持ってゆくのをお忘れになったのを、『いい加減に扱わないようにしましょうね』と母上が(私に)お教えおきあそばしたものです。どこでも(かまいませんから)西行という人がおいであそばしたなら、これ(僧衣と袈裟と人麻呂の絵と)を(その西行という人のところへ)持っていらして、渡してくださいませ。また、もし西行は(お坊さまの)お言葉のとおりにお亡くなりになっていますのなら、(お坊さまが)そこ(西行の墓所)にお参りされ

まして、(父の墓を) 御覧になるようなときには、お経をも(あげて) くださり、念仏をもおとなえして、(父の) 菩提を弔ってくださいませ。(それにつけても) ほんとうに、(お坊さまは) 父上がふたたびまた(帰って) おいでになったのだと思わないわけにはまいりません。なんて慕わしいお坊さまでしょう」と(言っ) て、(姫は西行の) 傍らに倒れ伏し、御袖にすがりついて、お嘆き悲しみになるので、(それを見れば) どんなに賤しい(もの)のあわれもわからぬ) 下男下女までも(涙の) 袖を絞らない者はいなかった。まして正真正銘の父である西行の胸の内を思いやらずにはいられず、胸を打つほど悲哀を感じるものだ。(家来の) 刑部も、そのほかの侍女たちも、みな涙を流していた。

**解答**

問1 a 〳候へ      b 〳候へ      c 〳候は      d 〳候は

問2 両親を失って家来も頼りにならず、後見役のいない心細い様子。〔29字・解答例〕

問3 B 〳私とこの娘はどうしても互いに親子として対面することはできないのだから、「西行という人ならもう死んでいる」ということにしてそのように言おう。

D 〳子でなくては、どこのだが、これほどまで昔別れた父親の死を嘆き悲しんでくれるはずがあるのか、いや、子だからこそ  
の悲しみなのだ。〔いずれも解答例〕

問4 自分の悲しみを隠し、また自分の顔を娘に見られて気付かれないようにするため。〔解答例〕

問5 仏道に帰依して出家する決意。

問6 (オ)

問7 出家して捨てた自分の幼い娘が母にも死別して心細く父の消息を求めているのに父と名乗れず、父は死んだと告げたときの娘の激しい嘆きに接した、どうにも切なく辛い心情。(79字・解答例)

解説

問1 「候ふ」は八行四段活用動詞。空欄の下はすべて接続助詞の「ば」であるので、未然形(順接仮定条件)か已然形(順接確定条件)にすればよい。aの直前の副助詞「ばかり」は限定で、「自らばかり」は「私一人だけ」の意。孤児になった姫君が自分の置かれている状況を語っている場面であるので、確定条件(ノデ)。後文の文末が命令形であるからといって安易に仮定条件にしないこと。bを入れるには冒頭の西行の会話に注目。西行(素性は明かしていないが……)は「東国へ急ぐ沙門なり」と言っている。とするならば、「西国修行」を既にしていたのである。後に続く記述で「西行に会っておいでになりますか」と尋ねていることから明らかであり、ここも確定条件(ト)。cを含む「」は姫君の母(西行の妻)の会話。その母が、「西行の行方がわかったら(作り置いている袈裟を)送ろう」と言っているのである。cは未然形に変えて仮定条件、後文に未来の時制を表す助動詞「(参らせ)む(ん)」があることもヒント。最後にd。西行が亡くなっていると聞いてはいるが、実際に亡くなっているかどうかは、姫君はまだわかっていない。従って「もしお亡くなりになっていきますならば」の意が適切で、ここも仮定条件。

問2 傍線部Aは、直接的には刑部が頼りない有様を示している。だが、それが何を意味しているかをもう一歩突っ込んで考えるべき。姫君は父に生き別れ、母にも死に別れており、刑部だけを頼りに生活をしている。しかしながらその刑部も頼りにならないのである。とするならば、ここは姫君の困窮して心細い様子であることを記述した方が正確であろう。

問3 まずはB。副詞「とても」は本来〈どちらにしても・どうせ〉の意だが、打消の語(ここは不可能の助動詞「まじき」を伴うと〈どうしても・とうてい〉の意になる。「ものゆゑ」で逆接の接続助詞もあるが、ここは「もの／ゆゑ／に」と品詞分解して、〈〜という理由で・〜なので・〜だから〉と訳す。「はかなく成り」は入試頻出の慣用表現で〈死ぬ〉の意、完了の助動詞「たる(たり)の連体形」も忘れずに訳出すること。「ばや」は未然形に接続した自己の願望の終助詞(〜たいものだ・〜たい)だが、意志のように訳すとうまく行く場合もある。さて、設問条件をみると、傍線部の人物関係をはっきりさせて訳す必要がある。リー

下文からも明らかのように、西行は顔を隠し、素性を隠して娘と対面している。とするならば、ここは西行が娘と「他人である僧と娘としてではなく」親子として」は対面できないでいるのだという記述が必須。また、それゆえに「はかなく成」ったのが「西行（他人になりすましてはいるが、実は自分のこと）」であることも明示せねばならないだろう。以上の点がしっかり書けていればよい。

次にD。「子／なら（断定の助動詞）／ず（打消の助動詞「ず」の連用形）／は（係助詞）」は、直訳すると〈子でないならば〉となる。「ず＋は」で仮定を表すことに注意すること。「いづれのもの」は〈いったいどの誰が〉ということ。係助詞「か」の結びは文末にある当然の助動詞「べき」で、疑問表現「いづれのもの」と併用されて反語の意になる。反語の訳出は、必ずそれがわかるよう、「いや、……」以下をきちんと記述すること。あとは文構造を確認し、「嘆き思ふ」が他動詞なので、その目的語（＝か）つて生き別れた父の死）を補えばパーフェクトである。

**問4** 傍線部は、自分の素性を娘に隠し、自分が死んだと偽る西行の心情を読み取る問題。傍線部より後を読むと、西行自身が「西行は死んでしまった」と語っている。西行が「笠を傾け」たのは、自分の顔を娘に見られて気付かれないようにするためである。また、傍線部の前には、「自らの素性を明かせば仏道修行の妨げになるので、『西行はもう死んだ』と言おう」という、仏道に帰依する西行の決意が語られている。そうはいつても、目の前にいる娘をかわいそうに思わないわけにはいかないだろう。「笠を傾け」たのは、嘆く娘を前にしながらも敢えて自らの素性を隠さねばならない西行の、悲しみを糊塗しようとする行動でもあったのである。

**問5** これは古文常識単語。仏教思想に彩られた古文ではよく出てくる単語なので、知らなければ今のうちに覚えておこう。

**問6** 言語表現の問題。「いかなる」は〈どういう・どのような・どんな〉の意であるが、その使用される文脈は自ずと限定される。すなわち、①疑問文を形成する②逆説仮定の条件節を導く③②の変形で）打消と呼応するという形である。イメージしにくければ現代語で考えてみるといいだろう。

〈例〉



①いかなる運命が待ち受けているのだろうか。

②いかなる事情があろうとも、出かなくてはならない。

③いかなる時にも慌てて行動してはならない。

さて、このことを踏まえて本文を見てみよう。傍線部の直前は「いかなる賤の男・賤の女までも」とあり、ここは③の用法である。ところが、傍線部自体は「袖を絞りけり」となっていて、肯定文で受けている。この部分を打消文にする必要がある（この時点で選択肢は(エ)か(オ)に絞られる）わけだが、単に打消の語を添えたのでは、文意が逆になってしまう。そこで「打消+打消」という二重否定の形にする。これによって〈どんな賤しい下男下女までも（涙に濡れた）袖を絞らない者はいなかった〉となり、文としての不自然さは解消される。

#### 問7

字数が多いので、傍線部に至った経緯・原因を時系列・因果の順に従って再構築しつつ、心情を説明すればよい。つまり、「西行自身が実の娘を捨てて出家した」↓「娘は母にも死別し心細い生活を送っていた」↓「西行はその娘と対面したが、自分が父だとは名乗れなかった」↓「父は死んだと娘に告げた」↓「娘は激しく嘆いた」↓「その嘆きに接した時の、実の父である『西行の心のうち』」↓どうにもつらく切ない心情」というフローをまとめればよい。主語——述語や修飾——被修飾の対応などに気をつけ、同一の要素をまとめながら解答を作成しよう。

《補充問題》

現代語訳

問1 (1) まるで別人のようになってしまった。

(2) 険しい道に落ちては死にたくない。

(3) 少しのことにも指導者はあつてほしいことである。

問2 (1) 家にあつてほしい木は、松と桜だ。

(2) 人が子を産んだ時には、男の子か、女の子か、早く聞きたい。

(3) 花というなら、このように薫ってほしいなあ。

解答

問1 (1) ごとく (2) たから (3) まほしき

問2 (1) 家にあつてほしい木

(2) 早く聞きたい

(3) このように薫ってほしいなあ

●  
メ  
モ  
●

## 【問題】(演習)

出典：『俊頼髓脳』／オリジナル問題

## 現代語訳

能因法師は、和歌を（話題にする時）も、うがいをして申し、歌書集などを（見る時）も、手を洗って（から）取り広げたそうさだ。ただ、（単に思いつきで）ちょっとしているのかと思っていたけれど、讃岐の前司兼房と申し上げた人が、能因を、牛車の後ろに乗せて、どこかへ行った時に、二条通りと、東洞院通りとの交わる場所は、（その昔、歌人の）伊勢の家であったが、子日の小松があったのを、先端の枝を結んで植えていたが、生長して、実に大きな松であったが、（その）木の梢が見えたところ、（能因は）牛車の後ろから、慌てて下りたので、兼房の君は、わけがわからず、「何事ですか」と尋ねたところ、（能因は）「この松の木は、高名な、伊勢の結び松ではございませんか。そのような（和歌に因縁のある）松を、どうして、牛車に乗ったまま通り過ぎてよいでしょうか、いやよくありません」と言って、はるかに（遠くまで）歩き離れて、（その松の）木の梢が隠れる距離になって、牛車に乗ったそうさだ。また、右近の大夫国行と申した歌人が、陸奥の国に下った時に、歌人が集まって、饞別をしたが、（ある人が）「白河の関を通り過ぎるような日は、水で鬢（＝髪）のほつれをかきなで、打衣などを着て通り過ぎよ」と教えたので、（国行は）「どういうわけで、そのようにしなければならぬのか。その国の人が、集まって見るのか」と尋ねたところ、「どうして、あの能因法師が、『秋風ぞ吹く白河の関』と、詠んだような関であつては、日常だといって、鬢をけば立たせたままでも通り過ぎなさってよいだろうか、いやよくない」と言ったので、人々は笑ったということだ。そうはいっても、「もしこの和歌の道に専心しようとお思になるならば、そのようにして（はじめて）、（よい）歌を詠むことがおできになるだろう」と申し上げたそうさだ。だから、この和歌の道に専心するような人は、たとえ末世であるとしても、（これらの逸話を）慎んで受け入れなければならないのであるようさだ。

問 1 (ウ)

問 2 髪を整え、打衣を着て白河の関を通り過ぎること。

問 3 たち

問 4 (オ)

問 5 能因法師が歌を詠んだ場所とはいえ、白河の関を越えるのにわざわざ身なりを整えるのはおおげさで、滑稽に感じたから。

〔解答例〕

問 6 (6) || (イ)

(7) || (エ)

問 7 (イ)